中学校

平成7年度

教育研究員研究報告書

外国語（英語）

東京都教育委員会

平成７年度

教育研究員名簿（外国語）

分科会名	区市町村名	学校名	氏名
第１分科会	千代田区	九段中学校	菅野宏治
	大田区	大森第七中学校	◎堀江昌枝
	豊島区	真和中学校	山岸順子
	調布市	第七中学校	河村明彦
第２分科会	目黒区	第二中学校	□吉田俊幸
	足立区	第十四中学校	柳田章
	葛飾区	立石中学校	中澤徹也
	昭島市	福島中学校	佐藤修
	東久留米市	久留米中学校	中島理智
	多摩市	多摩中学校	安藤昌明
第３分科会	墨田区	寺島中学校	○田島久士
	渋谷区	松濤中学校	佐藤弘子
	荒川区	第七中学校	佐藤真雄
	江戸川区	瑞江中学校	近藤浩
	八王子市	長房中学校	山下喜世子
	羽村市	羽村第二中学校	寺山育男

◎　世話人　　○　副世話人　　□　記録

担　当　教育庁指導部中学校教育指導課指導主事　　大野容義

研究主題

コミュニケーション能力を高めるために、基礎的な能力の育成を重視する指導の工夫

目　　次

Ⅰ　研究主題及び主題設定の理由 …… 2

Ⅱ　研究の経過 …… 2

Ⅲ　研究の構想 …… 3

Ⅳ　研究の内容 …… 4

第1分科会

1　小主題 …… 4

2　小主題設定の理由 …… 4

3　仮　説 …… 4

4　実態調査の結果 …… 4

5　具体的な方策 …… 6

6　研究の成果と課題 …… 10

第2分科会

1　小主題 …… 11

2　小主題設定の理由 …… 11

3　仮　説 …… 11

4　実態調査の結果 …… 11

5　具体的な方策 …… 11

6　研究の成果と課題 …… 16

第3分科会

1　小主題 …… 17

2　小主題設定の理由 …… 17

3　仮　説 …… 17

4　実態調査の結果 …… 17

5　具体的な方策 …… 18

6　研究の成果と課題 …… 23

Ⅴ　まとめと今後の課題 …… 24

研究主題

コミュニケーション能力を高めるために、基礎的な能力の育成を重視する指導の工夫

Ⅰ　主題設定の理由

現行の中学校学習指導要領に示された外国語科の目標は、「(1)外国語を理解し、外国語で表現する基礎的な能力を養い、(2)外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、(3)言語や文化に対する関心を深め、国際理解の基礎を培う」である。(1)は従前の指導要領にもあったが、(2)は今回初めて示されたため、どちらかというと注目され、重視されがちである。しかし、(2)を満たすためにはまず(1)の指導を欠かすことができない。外国語をきちんと聞いたり、読んだり、話したり、そして、書いたりすることができて、初めて外国語学習の意欲が湧き、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度ができる。

そのためには、さまざまな言語活動を一層充実させることによって、基礎的・基本的事項を定着させながら、コミュニケーションのためにそれを積極的に活用する能力・態度を育成する必要がある。さらに、生徒一人一人の発想を豊かにし、個性に応じた表現力などを育成していくことが大切である。

そこで、この研究を進めるに当たり、次の三つの小主題を設定した。それに基づき、各分科会では生徒や教師に対してアンケートによる実態調査を行い、生徒や教師の実態を把握した。そして、授業研究を通して指導の工夫を図りながら、研究主題を検証していった。

第１分科会では、「英語に対する興味、関心、意欲を引き出し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる指導の工夫」という小主題を設定した。生徒の興味や関心を喚起するような教材や場面設定を工夫することにより、英語を使おうとする意欲を引き出すことができれば、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てることができるであろうと考え、指導を工夫することとした。

第２分科会では、「リスニング能力を高めるために継続してできる指導の工夫」という小主題で、日常の授業の中で継続的に効果的なリスニングの指導を行い、リスニングの能力を高めれば、コミュニケーション能力を高めることができるであろうと考え、指導の工夫を図った。

第３分科会では、「生徒に自ら発話させる指導の工夫」という小主題で、生徒に基礎・基本の力を付けながら、かつ段階的に、継続的に英語を話す活動を与えていけば、自信をもって自ら発話できるようになるであろうと考え、活動例を中心に研究を進めた。

Ⅱ　研究の経過

総会	４月12日	都立教育研究所	年間予定、自己紹介、世話人等選出
第１回月例会	５月９日	墨田区立寺島中学校	研究主題決定、研究の進め方の検討
第２回月例会	６月１日	渋谷区立松濤涛中学校	研究授業Ⅰ（佐藤弘子教諭）研究構想
第３回月例会	６月23日	大田区立大森第七中学校	研究授業Ⅱ（堀江昌枝教諭）仮説の検討
第４回月例会	７月13日	荒川区立第七中学校	研究・内容方法具体化、実態調査の検討

御岳研究集会	8月20日～22日	青梅市御岳山宿坊	実態調査の分析と問題点の整理
第5回月例会	9月12日	江戸川区立瑞江中学校	検証授業Ⅰ（近藤浩教諭）報告書計画
第6回月例会	10月9日	豊島区立真和中学校	検証授業Ⅱ（山岸順子教諭）報告書検討
第7回月例会	10月27日	足立区立第十四中学校	検証授業Ⅲ（柳田章教諭）報告書検討
第8回月例会	11月21日	羽村市立羽村第二中学校	最終原稿検討・提出　補助資料作成準備
第9回月例会	1月18日	八王子市立長房中学校	発表会準備　公開授業指導案検討
研究発表会	2月9日	多摩市立多摩中学校	公開授業　（安藤昌明教諭）研究発表

Ⅲ　研究の構想

＜研究主題＞
コミュニケーション能力を高めるために、基礎的な能力の育成を重視する指導の工夫

第1分科会

＜小主題＞
英語に対する興味、関心、意欲を引き出し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる指導の工夫

＜仮説＞
生徒の興味、関心を喚起するような教材や場面設定を工夫することにより、英語を使おうとする意欲を引き出すことができれば、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てることができる。

＜内容・方法＞
(1)ゲームを使った活動
(2)ビデオ映画を使った活動
(3)英語の歌を使った活動
(4)スピーチを取り入れた活動

第2分科会

＜小主題＞
リスニング能力を高めるために継続してできる指導の工夫

＜仮説＞
相手の言っていることが聞き取れないことがコミュニケーションの意欲をそいでいる。
日々の授業の中で継続的に効果的なリスニングの指導を行い、リスニングの能力を高めれば、コミュニケーション能力を高めることができる。

＜内容・方法＞
(1)T－Fテストを中心とした指導例（意外性、ゲーム性をもつもの）
(2)Q＆Aを中心とした指導の工夫（聞こうとする状況が生まれやすい身近な内容：生徒のプロフィール）

第3分科会

＜小主題＞
生徒に自ら発話させる指導の工夫

＜仮説＞
生徒に基礎・基本の力をつけながら、かつ段階的に、継続的に英語を話す活動を与えていけば、自信をもって自ら発話できるようになる。

＜内容・方法＞
(1)音読
(2)話さざるをえない状況：Retelling
(3)話したくなる状況
(4)実際の言語使用により近い状況
：Show＆Tell

Ⅳ　研究の内容

第１分科会

１　小主題

英語に対する興味、関心、意欲を引き出し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる指導の工夫

２　小主題設定の理由

本年度、７月に行った実態調査で次のことがわかった。全学年を通じて、生徒たちは、自分にとって身近で現実に近い教材を用いた活動に主体的に参加できることを、「楽しい」と感じている。また、その活動を通じて「わかった」という成就感を求めている。したがって、このような活動を学年に応じて系統的に行い、３年間を見通した計画の中でより多く授業に取り入れることによって、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てられるのではないかと考え、この小主題を設定した。

３　仮　説

生徒の興味や関心を喚起するような教材や場面設定を工夫することにより、英語を使おうとする意欲を引き出すことができれば、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てることができるであろう。

４　実態調査の結果

７月の初旬に、生徒の英語に対する興味、関心、意欲の要素を知るためにアンケート調査を行った。調査の結果、都内16校の１年生から３年生までの中学生、2,695名の回答を得ることができた。以下、その分析である。

(1)　「あなたは今、英語の授業が楽しいですか。」の問いに「はい」「いいえ」「どちらでもない」の形式で答えてもらい、「はい」と答えた理由も書いてもらった。

①　学年による対比

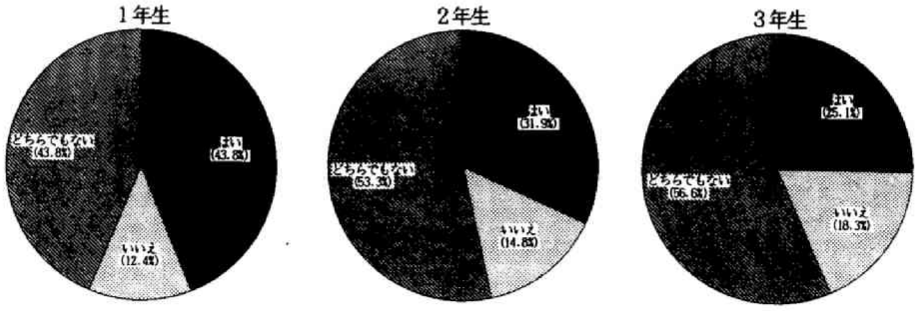
英語を楽しいと感じている生徒は学年が上がるにつれて減少し、一方楽しくないと感じている生徒は逆に増加する傾向にある。楽しいとする理由として、高学年になるにしたがって英語の技能そのものへの興味や関心だけでなく、それを身に付けることによって英語を使えたという成就感をあげているのが目立つ。たとえば、声を出して読むこと、英語の音声を聞くこと、英語の文を書くことを理由としているのが１年生に多いのに対し、３年生では、英語で会話ができたこと、外国人英語指導員（ＡＬＴ）と英語で話ができたこと、思うことを簡単な英語で書けるようになったこと等、自分から主体的に取り組むことによって得られた成就感や達成感を理由としていることが注目できる。

②　学年を通じて言えること

英語を楽しいと感じる生徒は、「楽しくない」と答えた生徒と比べた場合、その数は大きく上回る。楽しい理由としては、歌を歌ったり、ビンゴなどのゲームができたり、４技能のそれぞれ変化に富んだ学習など、英語の授業の多様性からくるものが多くあげ

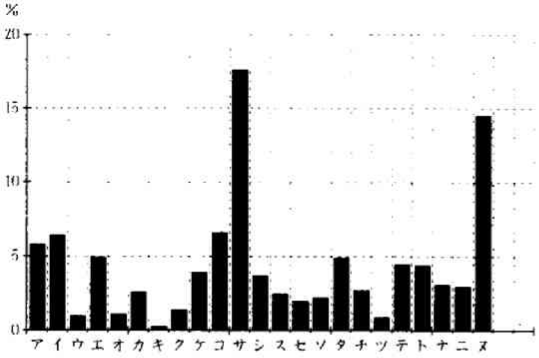
られている。一方、楽しくない理由では、「繰り返し覚えなければならないことが多い」「授業の進め方がパターン化されている」「だんだんわからなくなってきた」「先生がかわってしまった」等が顕著である。また、学年が上がるにつれてこのような理由が比較的多く書かれている。つまり、学習量の多さや授業内容の単調さ、系統性のなさからくる不適応と考えられる。「楽しい」理由は、「楽しくない」理由と表裏をなしているため、楽しい理由の要素を分析・考察し、それを授業の中に積極的に取り入れていくことが、多くの生徒が「楽しい」と感じる授業作りのためには重要であると言える。

グラフ①　あなたは今英語の授業が楽しいですか。



(2)　英語の授業でどのようなことをしてもらいたいかを、下記のような23項目の中から３つだけ選んでもらうようにした。(グラフ②)

グラフ②　あなたは英語の授業でどんなことをしてもらいたいですか



ア、友達同士での会話練習
イ、外国人の先生との会話練習
ウ、英語のスピーチ
エ、英語の歌を歌う
オ、英語で自由に作文を書く
カ、英語で手紙を書く
キ、英語で意見文を書く
ク、英語で詩や物語を書く
ケ、英語の聞き取り練習
コ、英語の歌を聞く
サ、英語版の映画やビデオを見る
シ、外国人の先生の英語を聞く
ス、テープの後について読む
セ、外国人の先生の後について読む
ソ、みんなで一斉に声を出して読む
タ、英語の物語を読む
チ、英語の新聞や雑誌の一部を読む
ツ、英語の詩を読む
テ、外国の文化や習慣について知る
ト、文法について詳しく知る
ナ、教科書の日本語訳を知る
ニ、教科書に出ていない単語をたくさん覚える
ヌ、日常会話に役立つ言い方を覚える

学年を越えて、(サ)「英語で話す映画やビデオを見る」と、(ヌ)「日常会話に役立つ言い方を覚える」を選んだ者が圧倒的に多い、映像の時代を反映しているのか、生徒の多くが臨場感のある事柄を英語を通じて楽しめること、また実用を目指して学習できることを望んでいると言えようか。友達同士での会話練習やＡＬＴとの会話練習、英語の歌を歌う、

又は聞くこと、英語の物語を読むこと、外国の文化や習慣について知ること、が比較的多いのも、同様に、目的意識に基づいた英語学習への意欲や関心の表れと言える。

5　具体的な方策

本分科会では、上記の仮説に基づき、生徒の興味や関心を喚起する教材として、次のようなものを取り上げ、実践を行った。

まず、言語活動にゲーム的な要素が加わることが、生徒の興味を引くことから、その実践例をあげた。つぎに、英語で話す映画を見ることの実践例。さらに、英語の歌を歌うことの実践例。最後に、身近な話題を英語でスピーチすることの実践例を紹介する。

指導例１：ゲームを使った活動（１年）

①　ねらい　　・身近なものを使って、簡単な英文を話すことができるようにする。
　　・双六ゲームを使って、生徒が興味をもち意欲的に取り組めるようにする。

②　指導過程

ア　人数　　１グループ４～５人程度

イ　時間　　20分程度

ウ　準備　　ゲームボード、ピクチャーボード、駒、サイコロ

エ　手順

１）最初にピクチャーカードを使って、身近な単語の復習をする。（pen, hatなど）

２）次に、それを使って文を作り、発表する。

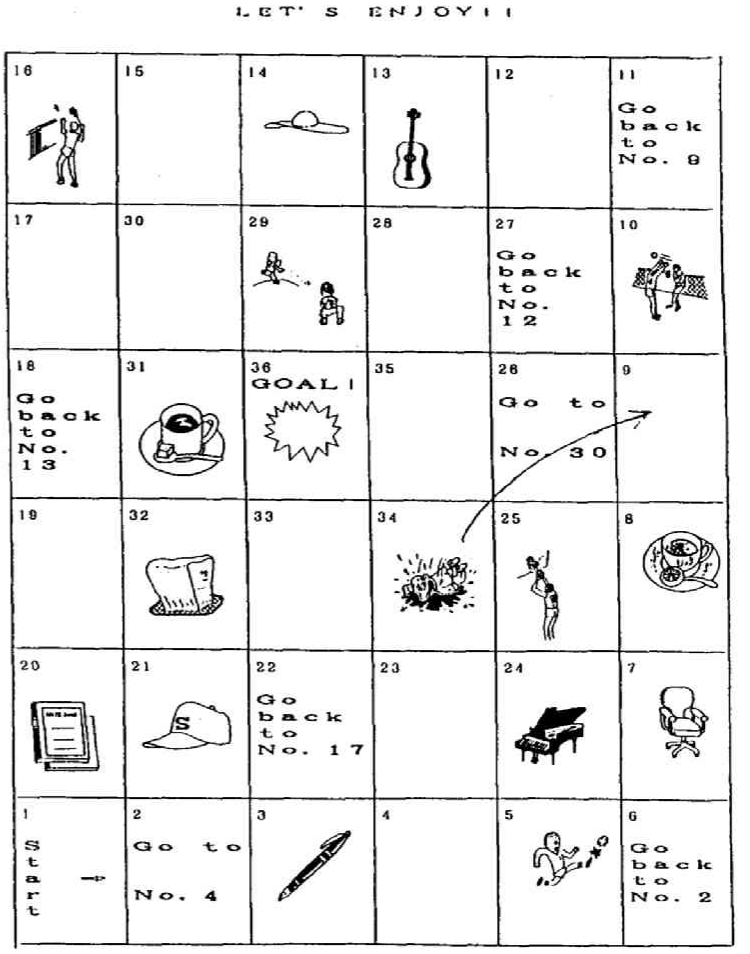
３）グループを班の形にして座らせ、じゃんけん等で、順番を決めさせる。

４）順にサイコロを振り、双六の要領で、ゲームを行う。

５）絵のところに止まったら既習の文型を使った文を発表する。（I play soccer. This is a cap. など）

６）言えなかった場合は、出た目の数を戻る。

＊文を作るのに、８秒以内など、時間制限をすると盛り上がる。



〈双六を使ったゲーム例〉

③ 考 察

Be動詞、一般動詞をある程度学習した後のまとめとして、ゲーム形式での復習を試みた。ゲームを授業の中に取り入れた場合、生徒たちは自然に英語で話したり、グループ内で積極的に英語でコミュニケーションをとっている。そして「またやりたい」という多くの生徒たちの声を聞くことができた。特に1年生の段階では、生徒たちの英語による活動への意欲を喚起し、英語への興味・関心を高める効果が大きい。これを日常の授業の中に継続的に、また学習段階に応じて系統的に行うことで、より一層の効果が期待できるものと考える。

指導例2：ビデオ映画を使った活動（1年）

① ねらい　教科書での既習英語表現が、ビデオ映画の中で生き生きとしたコミュニケーションとして使われていることに気付かせ、それを積極的に聞き取らせる。

② 指導過程　指導時間：2時間　準備：プリント、フラッシュカード
使用ビデオ映画：「美女と野獣」

	教師の指導	生徒の活動	留意点
事前	・ビデオの中で既習の英語表現を探しておく。	・日本語版で見ておく。	・日本語版での映画会などできるとよい。
当日の活動	(1)タイトルや名前をフラッシュカードで発音する。 (2)日本語で補足説明しながらビデオを見せ、既習の英語表現が出てきたらプリントに記入させる。また、ビデオの内容について、既習表現でQ＆Aをする。	・物語の中で、既習の英語がどのような場面で話されているか理解する。 ・既習の英語表現や単語で聞き取れたものがあったら、書き留めておくようにする。	・聞き取らせたい英語表現が使われている場面で、注意して聞き取るように生徒に言葉をかける。 ・速い言い回しは聞き取れなくてもよしとする。
	・英語版の映画を見た感想を書かせる。	・英語で話される映画を見た感想を書く。	・英語のどの言葉に感動したか。

③ 考 察

今回使用したビデオ映画は、英語の発音にくせがなく、生徒に聞き取りやすい表現が比較的多く、感動的な表現も多い。また、物語の内容がすでに生徒たちの間でよく知られており、導入がしやすい。このような特徴をもったものを精選して授業に取り入れることが必要である。生徒に書いてもらった感想の中には、「本場の発音が聞けてよかった」「自分の知っている英語の単語があったので、けっこう楽しかった」「最後にGastonが野獣を殺したときと、BellがI love you.と言ったときが、感動した」という感想があり、生き生きとした場面、また感動的な場面で使われている英語表現が強い印象となって生徒の心に残るものであることをうかがうことができた。

指導例３：英語の歌を使った活動（２年）

① ねらい

・英語の歌を通して英語に対する興味や関心を起こさせる。

・声を出して歌うことにより、英語のリズムに慣れさせる。

・英語の言い回しを自然に覚えさせる。

② 指導過程 ＜授業での位置づけ＞ 毎授業の初めにwarm-upをかねて歌う。

	教師の指導	生徒の活動	留意点
導入	・月初めに新曲を配り、ゆっくり音読する。 ・テープで曲を１回流し、歌詞やリズムを聞きとらせる。	・教師の後について音読する。 ・読めない語にはカタカナをふる。 ・曲の感じをつかむ。	・既習の文法事項があったら、気付かせる。
展開	・徐々に歌詞を覚えさせる。	・テープの歌に合わせて歌う。	・徐々に歌詞を見なくても歌えるよう励ます。
まとめ	・ワークシートを配り、単語又は語句の聞き取りをさせる。	・歌を聞きながら下線部に英語を書く。	・弱音になっている音を注意して聞き取らせる。

③ 考 察

現在２年生は、‘ＡＢＣsong’や‘Ten Little Indian Boys’等の歌を含めると、既に20曲以上の英語の歌を歌ってきている。選曲にあたっては、できるだけその時の学習内容に合うよう心がけた。例えば、１年生で進行形の導入時には‘Sailing’（Rod Stewart）を、２年生で過去形の導入時には‘Yesterday Once More’（Carpenters）や、‘Yesterday’（The Beatles）をとりあげた。発音がはっきりしていて、リズム感のある曲が生徒の間で好評であった。１か月間同じ曲を歌い続けると、初めは全く聞くだけであっても、３～４回目あたりから次第に声を出して歌うようになり、月末には、ほとんど歌詞を見ずに歌っている。10月に次のような実態調査を行った。

・「『英語の歌』が英語の学習をする上で役に立っているか」

役に立っている…73％　役に立たない…６％　どちらでもない…21％

・「『英語の歌』が英語の学習に対する意欲や興味を引き起こしているか」

引き起こしている…65％　引き起こしていない…４％　どちらでもない…31％

どちらでもないと答えた生徒のほとんどが、「楽しいのでこのまま続けて欲しい」とコメントしている。さらに「英語の歌」について、・訳をみると勉強になる　・ヒアリングの力がついた　・単語が覚えられる　・英語の歌を歌えるというのがちょっと自慢　・読めないものがあっても知らない内に覚えられる　・最初は難しいと思うけど後から楽しくなってくる　・いつのまにか口ずさんでいて、そのときに歌詞が意味不明でも後で分かったりするので楽しい、といった意見が多く出た。

実態調査の結果から、毎時間継続的に英語の歌を取り入れることが、生徒に英語に対

する興味や関心をもたせる一つのきっかけとなっていることがわかる。

指導例４：スピーチを取り入れた活動（３年）

① ねらい　自分の持っている写真をもとに自分たちにとって身近な話題で英語のスピーチをすることにより、意欲的にコミュニケーションを行おうとする態度を育てる。

② 指導過程

スピーチの要領

時間：約１分間（毎授業、４人ずつ行う。所要時間10分）

利用するもの：自分の持っているスナップ写真、新聞や雑誌の切り抜き等。

流れ：１)写真をテレビ画面に映し出す。　２)写真についてスピーチを始める。
３)聞き手は所定の評価用紙に記入。　４)スピーチ後、内容についてＱ＆Ａを行う。

スピーチの内容：写真に写っているものについて、自分との関わりを話題にする。

生徒の評価の観点：ア　話すときの声の大きさ、発音　イ　話すときの態度（聞き手の顔を見る、身振り手振り等）　ウ　話しの組み立て（分かり易さ、面白さ）　エ　良かったところや励ましの言葉を書く。

	生徒の活動	教師の指導	留意点
事前指導	１分間程度のスピーチになるよう所定の用紙に英語のスピーチ原稿を書かせる。	事前にでき上がった原稿についてスピーチらしくなっているかどうか、必要に応じて個別に指導を加える。	できるだけ易しく短いセンテンスを作るようにさせる。
当日活動	用意してきた写真などをテレビに映し、それについてスピーチを始める。 聞き手は評価シートに評価を記入しながら聞く。 スピーチを終えた後で、クラスの仲間から質問を受け、それに答える。	スピーチがスムーズにできるよう手助けする。 聞き手に評価シートを配布。 やや難しい内容と感じられる部分は、再度日本語で補足説明させるなどして理解を深めさせる。	原稿を見ず、聞き手の顔を見ながら話すよう心がけさせる。 身振り、手振りを交えながら話すよう心がけさせる。 恥ずかしがらず、行動にめりはりをもたせる。

③ 考　察

スピーチの内容について、臨機応変に英語の質問をすることはなかなか困難である。しかし、事前に質問者を決め、その内容も事前に考えさせておくなど、また場合によっては日本語の質問が飛び出してもよしとするなどして、徐々にＱ＆Ａを活発にすることができた。また、回を重ねて要領が分かるにつれて、自分のことをみんなに伝えたいという気持ちが高まり、より内容の濃いスピーチをすることができるようになった。

6　研究の成果と課題

生徒への意識調査を通して、生徒が「楽しい」と感じている授業の形態や要素を分析し考察した。さらに、その結果を基にして、生徒の興味・関心を喚起するような指導を工夫し、実践した。以下、その成果と課題である。

(1)　成　果

ア　（ゲーム）生徒全員が参加していく状況設定の中で、授業が活動的なものとなり、英語を楽しく使いながら、主体的に学ぶ姿を見受けることができた。

イ　（映画）映像のもつ力は大きく、以前見たことのある生徒でも、授業中食い入るように見ていた。授業後も生徒の間でビデオを見ての話題が広がり、確実に英語に対する興味、関心、意欲を生徒から引き出すことができたという手ごたえがあった。

ウ　（英語の歌）最初は意味が不明解で分かりづらい英語表現が歌の詩の中にあったとしても、繰り返し授業の中で歌うようにすることで、次第に生徒が自分でその歌を口ずさむようになり、その英語が身近なものになってくるようだ。それが新出の英語表現である場合は導入が大変しやすく効果的であった。また、毎回の授業のwarm-upとしても効果的であり、授業展開への盛り上がりをつくることができた。

エ　（スピーチ）主体的に英語で表現することで、主体的に相手の英語を聞こうとする態度が生まれた。また、身近な物を用いた身近な話題を英語にすることで、話し手は聞き手の興味を引こうとしたり、聞き手は意欲的に内容を聞き取ろうとしたり、英語で質問してさらに深い情報を得ようとしたりするようになってきた。

(2)　課　題

ア　（ゲーム）学習効果のあるゲームを考え、それを継続的に授業に取り入れていくことが大切である。しかしながら、生徒の興味や関心を持続させるようなゲームを考えていくことは実際問題としてなかなか困難である。実践例に示したゲームは生徒の興味・関心に応じて言語活動を発展させていくことができるものである。学年や進度に適したこのようなゲームを今後研究開発していくことが課題である。

イ　（映画）長編の映画を授業の中に継続的に取り入れることは、準備や設備の点から非常に難しいことである。しかし映画の中で使われる英語表現は生徒に強い印象を与え、興味付けに効果的である。英語版の良質な映画を精選して学期に１回程度の割合で計画的に取り入れていけるとよい。

ウ　（英語の歌）歌と言っても、生徒にとってある程度歌いこなせるものでなければ彼らの興味をそいでしまう。学年や進度に合わせて歌詞を吟味して、より難しいものでも歌いこなしていけるよう適切に歌を選別し、それを継続的に提供していくことが課題である。

エ　（スピーチ）スピーチを聞き取る力を高めるためには、生徒の既習の表現力を大きく超えることなく、生徒全体が学習していけるレベルを保ちながら進めていくことが必要である。また、スピーチの準備が生徒の能力を超えた過重な負担にならず、スピーチをしたり聞いたりする「楽しさ」が失われないように配慮しながら、少しずつ全体のレベルアップを図ることが大切である。

第２分科会

１　小主題

リスニング能力を高めるために継続してできる指導の工夫

２　小主題設定の理由

本分科会では「リスニング」というコミュニケーションの基礎的能力を授業の中でいかに効果的に育成できるかを中心に指導法の研究及び教材の作成を試みようと考えた。

「聞くこと」を受け身的な技能ではなく、生徒が自ら「聞きたくなる」ような指導内容、方法を重視し、更には「聞くこと」と「話すこと」の指導を分離せず、リスニングの内容を生徒が積極的に確認しようとする場を設けることで「リスニング」への意欲も能力も高まると考え、この小主題を設定した。そのために本分科会では日々の授業の中で活用できる創意工夫のある教材を作成することにした。

３　仮　説

相手の言っていることが聞き取れないことがコミュニケーションの意欲をそいでいる。日々の授業の中で継続的、効果的なリスニングの指導を行い、リスニングの能力を高めればコミュニケーション能力を高めることができるであろう。

４　実態調査の結果

リスニングの指導については、これまで数多くの研究が行われ、実践されてきた。そこで、本分科会の試みのポイントを明確にするため、都内公立中学校英語科教員約50名の協力を得て、リスニング指導に関する実態調査を行った。その結果、約60％の教員が何らかのリスニング指導を毎回の授業の中に取り入れており、継続的なリスニング指導の重要性が改めて浮き彫りになった。また、具体的にどのようなリスニング指導を行っているかという質問に対しては、リスニングテストの形で、True or False、Questions and Answers（以下それぞれＴ－Ｆ，Ｑ＆Ａ）を取り入れているという回答が圧倒的に多かった。また、市販のテストを使っての活動、歌を使ってのリスニングトレーニング、日常生活についての質問に、Yes、Noで答える活動など、様々な工夫がなされていた。他に、英語だけを使って授業を行ったり、ＣＤリピーターの特徴を生かしたり、テープスピードを調節できるレコーダーの利用なども報告された。

５　具体的な方策

「リスニング」指導には、大きく分けて２つの側面がある。

①　英語を聞き取り、内容の大意をつかむ指導

②　話し言葉での音の脱落、連結、弱化などについての指導

もちろんこの両面からの指導が不可欠であるが、研究主題の「コミュニケーション能力を高める」という観点から、①の指導を重視することにした。

また、小主題にあげたように「継続してできる指導の工夫」を考える上で、次の留意点を確認した。

①　聞こうとする状況（聞かざるを得ない、聞きたくなる）を設定する。

② 継続性をもたせるために準備の負担をできるだけ少なくする。

③ 意外性、ゲーム性をもったものを工夫する。

以上の点を総合し、現在最も多く実践されているＴ－Ｆテストと Q＆Ａの二つに注目し、指導の工夫を試みた。

(1) Ｔ－Ｆテスト

分科会での話し合いの中で、リスニングには意欲や集中力が欠かせないことが話題となった。そこで、現在行われているＴ－Ｆテストの形は変えずに、解答用紙に工夫をこらすことで、生徒の興味を喚起しやすいＴ－Ｆテストとなるようにした。

① 作成した解答用紙の特徴（資料１参照）

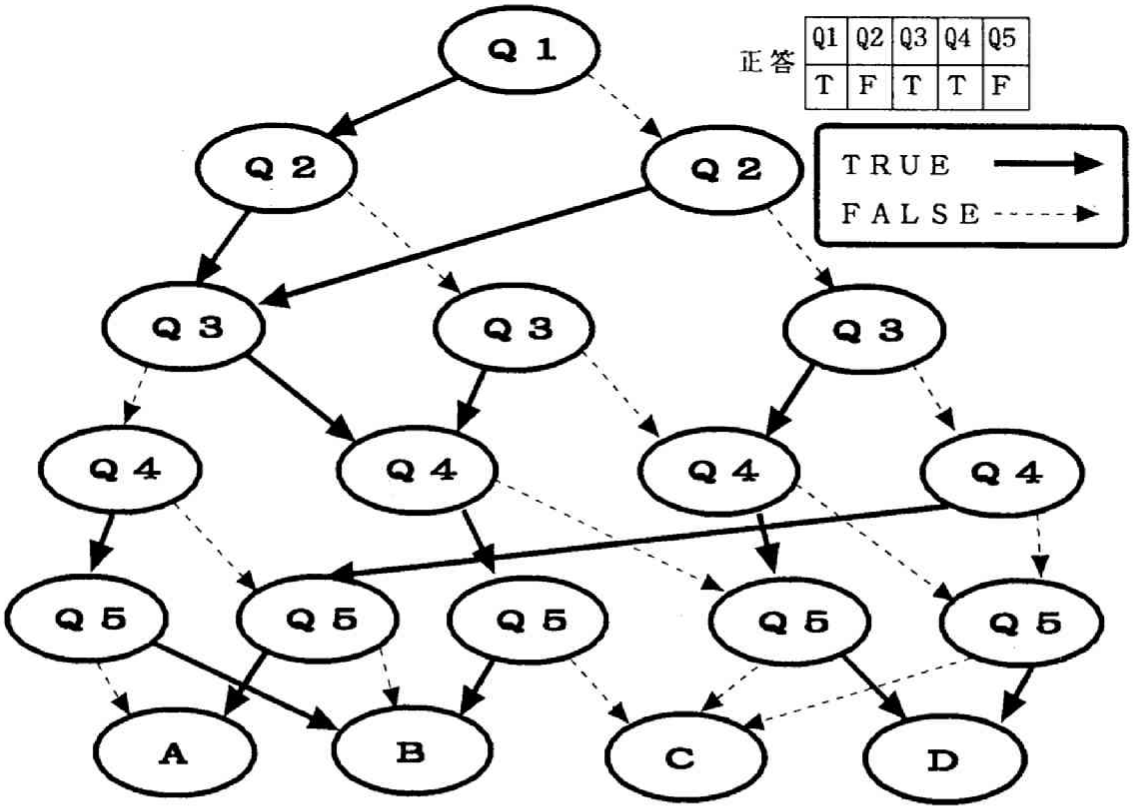
ア ５問のＴ－Ｆテストに対応する。

イ 32種類の解答用紙があり、すべての解答パターンに対応する。

ウ ＴかＦかを判断して枝分かれ状の経路を進むと、４つのゴールのいずれかにたどり着く。

エ 全問正解でなくとも、正しいゴールに到達することもある。

資料１



② 授業の準備

ア Ｔ－Ｆテストの題材の準備

教科書、又は市販の教材、自作の教材のいずれかを用意する。

イ　解答用紙の印刷

32種類の解答用紙から解答パターンに合った１つを選び印刷する。

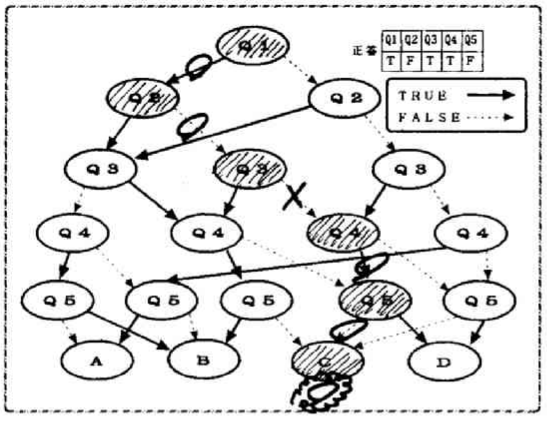
③　指導例（資料２参照）

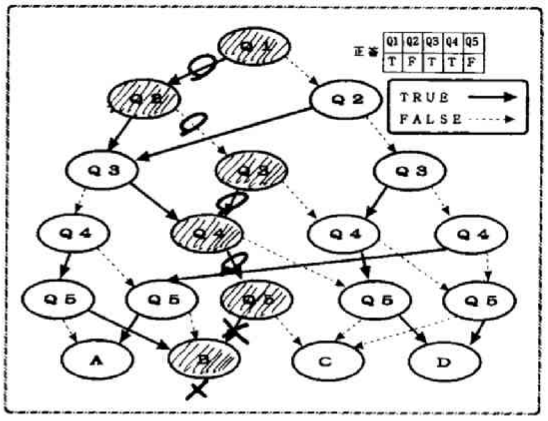
授業の中で、授業形態に合わせて取り入れるが、以下は、教科書本文の内容理解の場面で指導した例である。ここでは解答用紙の裏面に問題文と正答が印刷してある。

Procedure	Students	Teacher	Remarks
Oral Introduction of Text	Try to understand the contents listening to the teacher.	Introduce the contents showing the students some picture cards.	
	Don't look at the other side of the 'T-F sheet'.	Distribute 'T-F sheets'.	concentration
	Answer by drawing a T(or F) line one by one.	Give five sentences to students about the contents.	
	Turn the 'T-F sheet' over, and check each sentence and its answer.	Check students' understanding of the contents.	positive attitude

資料２　　解答用紙記入例１　　解答用紙記入例２

（Ｑ３で間違ったがゴールした例）　　（Ｑ５で間違えてゴールできなかった例）





(2)　Ｑ＆Ａ

Ｑ＆Ａは、Ｔ―Ｆテストと同様に授業の様々な場面で取り入れることができ、実態調査の中でも多くの取り組みが報告されている。そこで以下の点に留意してＱ＆Ａの工夫を試みた。

①　工夫上の留意点

ア　現実にある身近な題材を選ぶ。

生徒が興味をもって取り組めるように、架空のことではなく現実に身近にある題材を用いる。

イ　聞き取ったことが次の問題を解決する材料になる。

ただ聞き取るのではなく、その聞き取った内容が、次の課題を解決する材料になるように工夫する。それによって、聞くことのみではなく、話すことにもつなげていく。

ウ　確認のための聞き返しは認める。

教師の質問を聞き取れないときには黙ってしまうのではなく、教師に聞き返したりするなど、積極的にコミュニケーションを図るように促す。

② Introduction Card（資料３参照）

生徒全員に英語の自己紹介カードを作成させる。その後の授業で毎回１～２枚ずつこのカードを紹介しながら、リスニング及びＱ＆Ａの練習を行う。

資料３

Introduction Card

Class 1-（　　）№（　　）Name（　　）

1. I am（　　）years old.
2. I live in（　　）.
3. I usually get up at（　　）,
   and go to bed at（　　）.
4. I like（　　）.［スポーツ］
5. I like（　　）.［教科］
6. I like（　　）.［色］
7. I like（　　）.［動物］
8. I like（　　）.［食べ物］
9. I like（　　）.［有名人］
10. I have（　　）brother(s) and（　　）sister(s).
11. I have（　　）［数］（　　）.［ペット］
12. I am in the（　　）club.
13. My telephone number is（　　）.
14. My horoscope is（　　）.
15. My birthday is（　　）.

カードの作成に際しては、「英語で自己紹介をしよう。」「今まで知らなかったクラスの友達の意外な一面がわかるかも。」と動機づけを行う。ただし、生徒のプライバシーに関する質問には注意をはらう必要がある。

まず、教師がカードの内容を文章として読み上げ、そのカードがだれのものであるかを生徒にあてさせる。

次にそのカードの内容について、教師が英語で質問する。指名された生徒は、質問の

内容がよく理解できなかったときには "Pardon?" や "Once more, please." などと言って教師に聞き返す。また、カードの内容を覚えていないときには、カードの生徒本人に英語で質問し、答えを得る。

なお、資料3のカードは1学年2学期初めに作成したものである。学年、時期によってカードの内容を変えることができる。

③ 指導例

以下はあいさつの後のwarm-upとしてカードを使用した例である。

Procedure	Learners' Activities	Instructor's Guidance	Remarks
Warm-up		"Let's enjoy Introductoin Card."	
	One student picks up one of the cards.	The teacher shows the cards. "Please pick up one card."	
	The students listen.	The teacher reads the card substituting he/she for the subject noun I.	Change the order of the sentences on occasion.
	When a student can guess whose card that is, he/she tries to answer.	The teacher tells whether the answer is right or not. Even if the answer is right, the teacher keeps reading. "Listen more."	
	Students go on listening until the last.	After reading the whole card the teacher asks some students some questions about the contents of the card.	
	Some students answer the questions. When they forget the contents, they say, "I don't remember," and ask the student of the card.	When the students can't understand the questions, the teacher lets them say, "Pardon?" or "Once more, please."	

6　研究の成果と課題

(1)　T－Fテストについて

ア　実際に授業の中で使ってみたところ、目新しさもあり、概して好評であった。解答用紙の形態については、雑誌等でなじみのある生徒が多く受け入れやすかったようである。どのゴールに到達するかについては偶然性があり、ゲーム的な要素が含まれているために、単にT又はFだけで答えるT－Fテストよりも、生徒の意欲が一層高まった。

イ　初めは積極的にこの活動に取り組む生徒も、回を重ねると、興味が薄れてくる。いかに生徒の興味を持続させるか、さらに検討を要する。

ウ　解答用紙を提出させ、生徒の解答の傾向をつかむためには、資料2のように解答用紙の矢印部分に○又は×を書く形で答えあわせをさせればチェックしやすい。

(2)　Q＆Aについて

ア　実際に授業の中で、warm-upとして行ってみたが、おおむね好評であった。生徒にとっては話題が身近で親しみやすく、かつ今まで知らなかった意外な情報が得られるかもしれないという期待感もある。また、だれが最初にカードの人物を当てるかを競うというゲーム性も手伝って、意欲的に取り組む生徒が多い。

イ　1回に1～2枚のカードで10～15分の活動ができ、warm-upに適している。

ウ　英語を聞くときの集中力がついてきた。

エ　一度カードを作成すれば、以後の授業で継続的に使用できる。ただし、マンネリ化を招かないように、指導段階・時期によって、カードの文型・内容を作りかえる必要がある。

オ　単に聞き取るだけでなく、話す能力にもつなげたい。そのために、次の二つの事項について十分な指導を行う。

①　教師に聞き返すこと。

②　教師の読み上げたカードを作成した生徒本人に、カードの内容について積極的に英語で尋ねること。

第３分科会

１　小主題

生徒に自ら発話させる指導の工夫

２　小主題設定の理由

英語を何年も学習してきても、満足に話すことができない人が多い。それを少しでも改善したいという願いから、第３分科会ではコミュニケーション能力の中の「表現の能力」、特に「話すこと」に注目して研究を進めることとした。

(1)　「話すこと」の指導と音読指導

生徒が積極的に発話をするようになるためには、適切な音読指導等で生徒が英語を声に出すことに自信がもてれば、「話す活動」への参加意欲も高まり、自分の考えなどを自分の言葉でも表現しようとするようになると考えた。

(2)　音読指導の課題

しかし、実際には学年が進むにつれて一般的に音読の声が小さくなっていく。このことは、生徒が次第に英語を自信をもって読むことができなくなり、音読が「話すこと」の基本となっていくことを実感できないでいることを表している。そこで、自然なリズムやイントネーションを重視した音読の指導により、「話すこと」への指導につなげていけるのではないかと考えた。

(3)　「話すこと」への段階的な指導

英語で声を出すことに自信をもたせる音読から、さらに自分の言葉で表現する活動へと少しずつ活動内容を高度にしていく段階的な指導を工夫する必要があると考えた。

そこで本分科会では、生徒が主体的に発話できるようになるためには、日常の授業の中でどのような音読指導や、「英語を話す活動」を行っていけばよいかが重要な課題となると考え、この小主題を設定した。

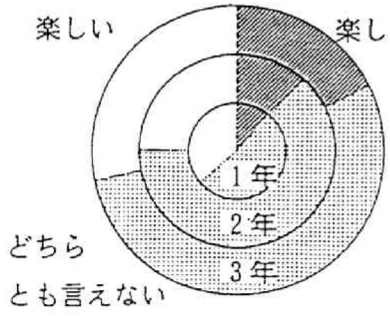
３　仮　説

生徒に、基礎・基本の力を付けながら、英語を話す活動を継続的に与えていけば、自信をもって自ら発話できるようになるであろう。

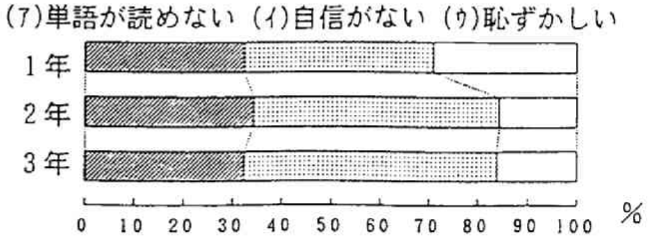
４　実態調査の結果

７月に都内公立中学校生徒約1,000人を対象に、次のアンケート調査を行った。

〔質問１〕「声を出して教科書を読むことは楽しいですか」



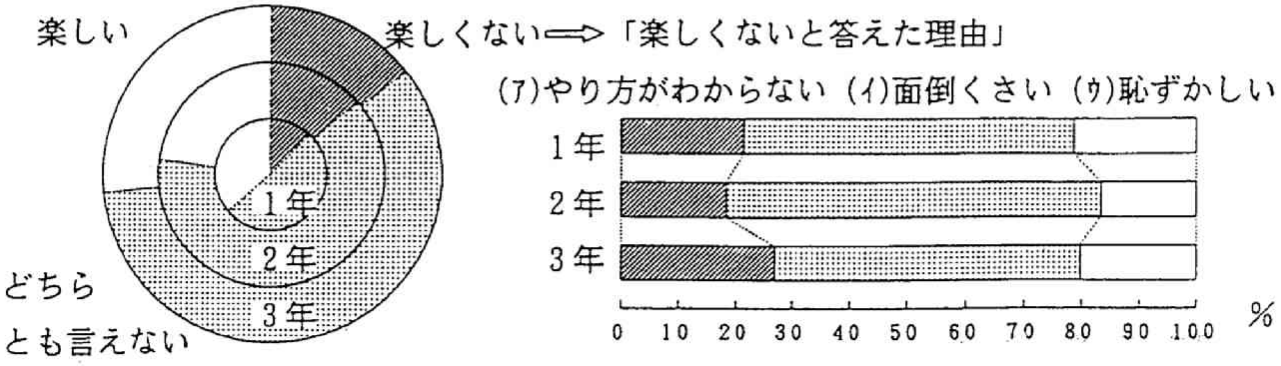
⟹「楽しくないと答えた理由」



質問１については、学年が上がるにつれて「楽しくない」の割合が増加している。これは、「自信をもって読めない」「単語の読み方がわからない」といった理由によると思われる。したがって、教科書の音読練習の指導法を工夫する必要がある。

次に、「どちらとも言えない」と「楽しくない」の割合の多さにも注目したい。これは、一般に音読指導の工夫の足りなさを表しているのではないか。音読練習が「実際に発話を促す練習内容」になっているか、又「基礎的な音読練習の積み重ねが、英語を話すことへの自信につながる」という意識を生徒にもたせるように音読練習を進めているかを考える必要がある。

〔質問２〕「授業中友達どうしで英語で質問し合うことは楽しいですか」



質問２については、「楽しい」と答えたものが１年生で36.5％いる。これは、初めて学習する英語に対しての興味・関心の強さや、ペアーワーク等授業形態の面白さによる結果であると思われる。しかし、質問し合う内容については、単純で、生徒の知的レベルに合っていないものが多いため、約５割の１年生は「どちらとも言えない」と答えているのではないだろうか。２・３年生についても、約６割もの生徒が「どちらとも言えない」と答えている。これも質問し合う内容が「生徒自身が英語をより使ってみたい」と思えるような、「意味のあるもの」になっていないことが原因の一つであると思われる。つまり、知的レベルに合っており、興味をもって自ら発話できるような内容をもった言語活動の工夫を継続して行っていくことが必要である。

5　具体的方策

本分科会では、生徒が自信をもって発話するための基礎となる音読指導、及び生徒が意欲をもてるような活動について検討した。なお、後者については、以下のような状況で行う活動が考えられる。

(1)　英語を話さざるをえない状況

例　①　Retelling　②　Questions & Answers　等の活動。

(2)　英語を話したくなる状況

例　①　ＡＬＴとの協同授業の中での活動。　②　個人の情報に基づく活動。

③　「電話で友達を誘う」等、個人へのメッセージ性の高い活動。

(3)　実際の言語使用に近い状況

例　①　Show & Tell　②　Interviewing & Reporting　③　Speech等の活動。

以下に、音読の指導例と、いくつかの活動の指導例を示す。

指導例　1　音読

①　指導のねらいと留意点

教科書の音読は「話すこと」の言語活動の一つである。さらに、内容を理解した上での音読であれば、理解した内容を表現し、発表する場とすることができる。

自信をもって教科書を読むことができるようにするための工夫として、リズムやイントネーションを重視して、より自然な英語に近い読み方の指導をする。リズムボックスや手拍子等を利用することで、平たんになりがちな教室での音読に変化をもたせることができる。多少の発音やアクセントの間違いがあったとしても、正しいセンテンスストレスがおかれて英語の流れにのっているならば相手には意味が通じる。また逆にそれができていないと、たとえ一つ一つの単語の発音が正しくても、非常に通じにくいということを生徒たちにも実感させたい。ただし、入門期の段階では、個々の単語の発音・アクセントについても必要に応じて、しっかりと指導していきたい。

②　指導内容・方法

ア　教科書を書き換えた音読指導

教科書の音読指導は、生徒にただ単にテープレコーダーの後について「まねて読め」というのではなく、どこを強く読むべきかなどを指導していく必要がある。その上で、教師やテープの後について徹底的に読みの練習を繰り返してみた。教科書ではリズムに乗りにくい構成になっている場合もある。そのようなときには教師側で、生徒が読みやすいように、そしてそのページの目標文が印象に残りやすいように書き換えたものを与えてみた。

<教科書の書き換え例>

NEW TOTAL ENGLISH 1

p.37 Lesson 6D

S: My father has a hobby.
He is a painter.
He paints pictures
of mountain scenery.

Y: Is your mother a
painter, too?

S: Yes, she is.

Y: Is she a good painter?

S: No. She isn't a very
good painter.

→

My father has a hobby.
He is a good painter.
My mother has a hobby.
She is a painter.
But she isn't a good painter.
My brother has a hobby.
He is a painter, too.
Is he a good painter?
Yes, he is. He's a very good painter.
My sister has a hobby.
She is a painter, too.
Is she a good painter?
Oh, no.
She isn't a very good painter.

リズムに乗りやすいものへの書き換えには、まず「文法事項・語い・特定の発音」のいずれに焦点を絞って書き換えるかを決める。そして、重点的に教えたい項目を繰り返し使うように工夫する。そのとき、one-two-three-fourのビートを手拍子や指の

スナップ等でカウントしながら書きかえるようにするとよい。あくまでも、この1－2－3－4のビートはストレスがおかれる語に対応していくものである。

例）
1　　2
My father has a hobby.

3　　4
He is a painter.　*

イ　リズムを重視した音読指導

以前から行われていた、［read aloud→memorize→repeat］を少し変えてみた形の［リズムを重視した音読→read-and-look up-and-say→暗唱（音読を続けることによって自然に暗唱ができるようになる）］に取り組んでみた。手拍子や机をタップするといった単純なビートを教室の中に響かせるだけで、生徒たちの音読にリズムが生まれてくる。顔を上げて「言う」ときに一人一人の顔が本から離れて、しっかりと声を出しているかよく観察する必要がある。この活動は、結果的には、教師に向かって「話すこと」になると考えられる。

ウ　内容理解を先行させる音読指導

なお、音読練習の前に Oral Introductionなどにより、教材の内容を理解させておくことや、練習中は、絶えず教師が発音をチェックすることも必要である。

③　考　察

本指導を通して、多くの生徒が意欲的に音読に取り組み、結果として、自然に暗唱できる者も多くなった。このような活動を継続することで、生徒は英語を音声化することに自信をもつことができ、更に高度な活動（Show & Tell, Speech, Skitなど）へと発展させていくことができる。

指導例　2　Retelling

①　指導のねらいと留意点

「英語を話さざるをえない状況」の例として、Retellingを取り上げた。これは、教科書本文の内容、又はそれをrewriteしたものを、生徒が少しでも多く自分の言葉で話す活動である。この言語活動は、以下に示すような手順で行うことが大切である。

まず、Oral Introduction (interaction)の際の「板書計画」をしっかりと立てておく必要がある。板書には絵やキーワードなどを工夫する。生徒は板書を見ながら、Retellingをする。初期の段階では、これをプリントして、練習のときに生徒に持たせる方が活動をしやすい。また、教科書の対話文は、教師がnarrativeに書き換えて、それを教材として用いる方が活動を行わせやすい。この活動は生徒の「モノローグ」の形を取るからである。

なお、この活動の延長線上に Oral Describing（Talking)、例えば、Show & Tell（指導例3参照）や Story-telling, Speechがある。Story-tellingは、自分で作り出したストーリーを語る活動であるので、Retellingの次にくるものと位置づけられる。

②　指導内容・方法

ア　指導手順（導入時）の例

a．教師による Oral introduction (interaction)

b．Explanation（a．で触れられなかった部分）

c．Reading（Chorus→Buzz→Individual、指導例１参照）

d．教師によるRetellingのモデル提示（慣れてくれば、省略可）

e．Practice　（ペアで話し手と聞き手になって）

f．Demonstration

イ　指導手順（復習時）の例

a．Choral reading

b．Questions & Answers　（復習教材に関するもの。慣れてくれば、省略可）

c．Retelling（Practice→Demonstration）

③　考　察

この活動は１年次から取り組んだ。また、丁寧に教え、少しずつ自信を与えながら、生徒の発話量を徐々に増やしていくことができた。

なお、生徒に教科書の本文の丸暗記を課するものではないことにも留意した。また、教科書の Oral introduction (interaction)では触れられなかった部分も当然あるわけなので、rewriteの中で更に情報を付け加えて内容をふくらませたり、絵等の視聴覚的教材を補助として用いた口頭発表もさせることができた。

指導例　3　Show & Tell

①　指導のねらいと留意点

「実際の言語使用に近い状況」を設定する指導例として、Show & Tellが挙げられる。このShow & Tellは、話し手が本当に伝えたい内容を、聞き手にわかってもらうために表現する活動であり、また、聞き手も相手の話に興味をもって聞こうとする活動である。発表の際には、必ずその内容を示す実物や、絵・写真などを提示することで、話し手にとっても話しやすく、また、聞き手にとっても理解しやすくなる。

なお、扱う話題に必要な言語材料や語いを必要に応じて指導する。

②　指導内容・方法

ア　指導内容

生徒にとって適切な話題を選定する。以下に例を挙げる。

①本人に関すること	例：自己紹介、私の趣味、好きなスポーツ・食べ物、宝物
②家族・友人に関すること	例：私の家族、私の友人、私のペット
③日常生活に関すること	例：私の１日、私の好きなテレビ番組
④学校生活に関すること	例：学校紹介、クラブ活動、遠足、修学旅行、将来の夢
⑤地域社会に関すること	例：私の町
⑥旅行に関すること	例：夏休み、冬休み、国内旅行、海外旅行
⑦文学・芸術に関すること	例：私の好きな本、音楽、美術

イ　指導方法

毎回、授業の始め５～10分程度５～６人ぐらいずつ前に出て発表する。（個人か班）そして、その内容について、質疑・応答を行う。（個人か班）

・指導手順の例

a．話題を与え、文章を作成させる。

b．ペアで練習し、班内で発表させる。

c．全体の前で発表させる。

d．聞き手には、必ず質問をさせる。

ウ　【生徒作品例】（夏休みの思い出）

I went to grandmother's house with my family. I got a WALK MAN. It sounded very good. So I was very very happy.

（原文のまま）

（ペアでの練習）

（Show & Tellの発表）

③　考　察

Show & Tellで扱う題材は生徒にとって身近なものであり、自分の本当に伝えたい内容なので、楽しく話せたという自己評価が非常に多かった。しかも、最初にペアで練習し、次に班内で発表し合っているので、段階を追って発表する訓練の場にもなった。このように、実際の言語使用により近い状況を設定し、継続的・段階的に指導することで、生徒は、自信をもって主体的に話そうとするようになってきた。さらに、聞き手も実物などがあるため、興味をもって聞くことができた。

以下に生徒の感想をいくつか挙げてみる。

生徒A　『最初は発表するのがいやだったけど、みんなが発表するのを見て自分も自信がつき、英語が楽しく話せたと思う。今度は下を見ないで顔を上げて、大きい声ではっきりと話したり、体を使って表現すれば、もっとよくなると思った。』

生徒B　『ふだんあまり自分の思いを書いたり、話したりする機会がないので結構楽しかった。それに、前にでて発表したとき、みんなが聞いていてくれたのでうれしかったし、自信がついた。』

生徒C　『この活動を通じて、自分の考えやできごとについて話せるようになった。また、相手の話を聞き取ることができた。もっと単語を知っていれば、もっといろいろな表現ができるのだなと思った。あとは、対話などができればいいと思った。』

生徒D　『今までは全く英語を話せなかったけど、簡単な英語の文を話せるようになった。』

6　研究の成果と課題

「話すこと」の指導では、自信をもって声を出すことが基礎・基本の力となるため、音読を重視した。更に「英語を話す活動」を継続的に行うことが重要であるという考えに立ち、コミュニケーション能力を高める音読の在り方やRetelling, Show & Tellなどの活動を取り入れた指導の研究を進めた。その結果、次のような成果と課題が明らかになった。

(1)　成　果

ア　リズムやイントネーションを重視して、より自然な英語に近い読み方になるように工夫して指導することで、正しいセンテンスストレスを身に付け、自信をもって音読できるようになった。同時に、音読の成果を、他の活動の中でも状況に応じて生かせる生徒が見られるようになった。従って音読はそれだけに止まるのではなく、「英語を話す活動」の基礎となることが実感できた。

イ　教科書の文をそのまま音読させるばかりでなく、乗りやすいリズムになるように文を書き換えて音読させることにより、大切な文型などの覚えやすさも伴い、意欲的に音読を行う生徒が増えた。

ウ　発話する機会をできるだけ多く授業の中に取り入れることで、生徒が日常の音読練習の大切さを実感して、更に意欲的に取り組むようになった。

エ　Retellingでは、その学習段階に応じて活動できるため、生徒自身が抵抗なく取り組むことができる。そして、学習が進んでくると自分で積極的に内容を膨らませるようになったり、異なった表現を使ったりする生徒もでてきた。

オ　Show & Tellの活動では、初めのうちは恥ずかしさや自信のなさで発表できなかった生徒もいた。しかし徐々にペアや小集団の練習で自信をつけたり、他の生徒の発表を聞いたりしていくうちに、発表内容のメモを見ないで行おうとする意欲的な態度を示す者もでるようになった。

(2)　課　題

ア　RetellingやShow & Tellは、毎時間行うわけではない。そのため、音読の楽しさに関して「どちらともいえない」または「楽しくない」と感じている生徒に、音読が「英語を話すこと」に有効であることを実感させられるような他の言語活動をできるだけ多く取り入れる工夫が必要である。

イ　音読練習や発話の機会を増やすために、一時間一時間の指導過程や年間指導計画を十分吟味する必要がある。

ウ　「話すこと」の指導では、一人一人の興味・関心に応じた内容の設定や個別指導を工夫する必要がある。

エ　「話すこと」の活動については、その発達段階に応じた評価方法を研究する必要がある。

オ　「表現の能力」の「書くこと」との関連についての研究ができなかったため、それが今後の課題として残された。

V　まとめと今後の課題

本研究は、コミュニケーション能力を高めるためには、何よりも基礎・基本の充実を図ることが不可欠である、という共通認識のもとでスタートした。「コミュニケーション能力を高めるために、基礎的な能力の育成を重視する指導の工夫」という主題を掲げ、三つの分科会でそれぞれ仮説を立てて研究した。

第１分科会では、英語に対する興味・関心・意欲をどのように引き出したら、積極的なコミュニケーション活動へとつなげることができるかという観点で、研究を行った。実態調査によると、生徒が英語の授業を楽しいと感じる理由として、４技能をそれぞれ伸ばせるような、多様な授業形態を挙げている者が多く見られた。そこで、さらに英語に対する興味や関心を抱かせるような言語活動を絞りこんで、それぞれに発展させることにした。ゲームは工夫次第で、生徒が積極的にコミュニケーションを図ろうとする言語活動となる。ビデオは、生徒に感動を与えるひとことに注目させ、それが実際の場面の中でどう用いられているかを聞き取らせ、実感させる教材である。英語の歌は、楽しみながらwarm-upを図れるといった効果をねらいとしたものである。３年生で行ったスピーチは、回を追うごとに話し手の発表意欲が高まり、それゆえに聞き手となっている生徒にも、主体的に集中して聞こうとする態度が生まれていった。

第２分科会では、日々の授業のなかで、継続的、効果的にリスニング指導を行うことで、リスニング能力を高め、さらにコミュニケーション活動へと発展させる指導の在り方を研究した。現在実践しているリスニング指導法の具体例を集めた結果、多くの先生方がTrue or False（Ｔ―Ｆ）とQuestion and Answers（Ｑ＆Ａ）を取り入れていることに着目した。そこで、従来のやり方にゲーム性を加味し、生徒の興味を引き付けようと工夫を重ねた。Ｔ―Ｆでは、32通りの用紙を作成することで、毎回集中して聞く生徒が増えた。またＱ＆Ａでは、単なる聞き取り練習ではなく、積極的な発話にもつながっていくよう工夫した。その結果、英文の内容に興味を抱き、多くの生徒が以前より積極的に聞き、話そうとする態度が見えるようになってきた。

第３分科会では、リズム、イントネーションなどを重視した音読を積み重ね、継続的に英語を話す機会を与えることにより、生徒は自信をもって自ら発話するようになると考え、研究を行った。音読は外国語学習にとって大切な指導の一つでありながら、学年が進むにつれて生徒の声が小さくなりがちである。そこで、音読しやすいリズム感のある文に書き換える等の工夫を加えて指導を行った結果、意欲的に音読する生徒が増えた。さらにRetellingやShow & Tellといった活動を取り入れると、音読が英語を話す基本となることを実感し、日常の音読練習を大切にするようになるなど、相乗効果をもたらすようになった。

この研究を通して、継続的に生徒の興味や関心を向けさせ、しかも意欲的に取り組めるような教材の精選を図ることが大切であることと、基礎的・基本的事項を定着させ、伸ばしていけば、やがてコミュニケーション活動へとつながり発展させられることがわかった。

これからも生徒一人一人の興味・関心に応じた教材作りの研究とともに、コミュニケーション能力の育成を目指した授業の工夫について、研究を深めていきたい。